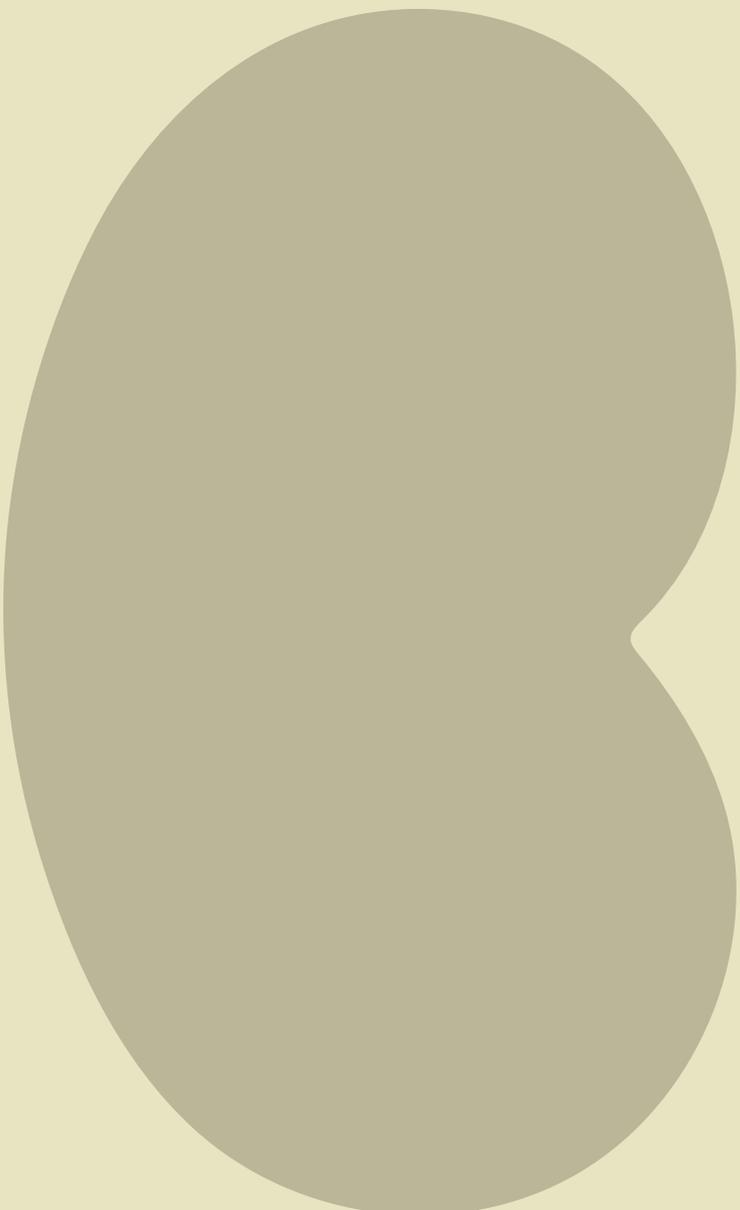


2024—2025





文化村クリエイション

2022年3月奈良県天理市にオープンしたなら歴史芸術文化村(以下、文化村)は、文化・地域振興を行う拠点として奈良県が整備しました。道の駅でもあり、文化財修復工房の通年公開、アーティスト交流、幼児向けアートプログラム等を行う多機能複合施設です。アーティスト交流プログラムでは、公募のアーティスト・イン・レジデンス「文化村AIR」、奈良出身・在住のアーティストを紹介する「奈良ゆかりのアーティスト交流プログラム」、そして「文化村クリエイション」を実施しています。

「文化村クリエイション」は、先進的な取り組みを行うアーティストを文化村職員が選定し、リサーチ、制作、発表を行うとともに、創作の過程を開いていく試みです。

日々の暮らしやリサーチの中で吸収した種が、どのように芽を出し花ひらくのか、その過程には必ずしも作品に表れないたくさんの発想のかけらや逡巡があります。一見関係がないものや、無駄とも思える部分に宿る豊かさへ、少しでも触れるきっかけとなることを目指しています。

文化村クリエイション vol.6

文化村クリエイションでは、アーティストが充実した創作を行えること、また来訪者がその過程に触れられる機会となることを目指しています。特に、1年目はこの土地だからこぞできる創作活動を模索すること。2年目は「創作の過程を開く」ことにさらに焦点を当て、それまで作品以外の部分を積極的に開示してこなかったアーティストを招聘しました。

そんな中で開催したアーティストトークにて、参加者から「クリエイションとはなんだ?」と質問が出ました。創作の訳語である旨と本プログラムにおける言葉の射程、企画趣旨などをお話したところ、「わからん」と一蹴されました。これをきっかけに3年目の今回は、わからないだけで終わらせないことを意識することとなりました。

魅力がより広く伝わる、雄弁な作品と作家を、と考えて招聘したのが、美術家・版画家の若木くるみです。作家に会ってみたいと思わせる作品と、人間味溢れる人柄。そんな若木がスタジオの扉を解放して制作し続けることで、創作が別世界の理解し難いものではなく、同じ人間が心血を注いでいるものであることが、直感的に伝わるのではと期待しました。

期間中は、若木に魅せられて2度3度と来訪する方がひとりではありませんでした。「わかる」ことよりも「わからない」ことこそが美術の醍醐味のひとつと言えますが、「わからない」と「伝わる」が両立し得ると、改めて感じる機会となりました。

遠山きなり(なら歴史芸術文化村/アートコーディネーター)

vol. 6

若木くるみ KURUMI WAKAKI

美術家、版画家、ランナー。1985年北海道生まれ。2008年京都市立芸術大学美術学部美術科版画専攻卒業。木版画制作の他、身近な物を版として使用する版画作品や、自身が作品の一部となる作品の制作を行う。ランナーとしても活動し、246kmのマラソン・スバルタスロンを完走する経験も持つ。主な受賞歴に第12回岡本太郎現代芸術賞(2009)、六甲ミーツ・アート大賞(2013)、京都市芸術新人賞(2022)、個展に「若木くるみの制作道場」(2013、坂本善三美術館、熊本)、「版ラン!」(2018、富山県美術館 TAD ギャラリー)、グループ展に「京都新鋭選抜展」(2021、京都文化博物館)、「TARO 賞の作家III 境界を越えて」(2023、川崎市岡本太郎美術館、神奈川) 他。

2024 | 7月20日(土)ー9月23日(月・祝) …… 公開制作+作品展示「修復わたくし」

期間中の土曜・日曜・祝日 …… 修復くわたくし>工房見学ツアー

9月7日(土) …… アーティストトーク

版画家・若木くるみは、大学で専攻して以来継続する木版画や、身近なものを版とする作品、自身が作品の一部となるパフォーマンス要素の強い作品などを制作してきました。確かな技術に裏打ちされ、複製、転写、反転などの特性を駆使して、版画の可能性を拡張しています。何よりそこには、心から創作を楽しむ様子と、日常の悲喜こもごもを創作のエネルギーへと転換する鮮やかさがあります。

本プログラムでは、公開制作と作品展示を同一空間で並行して行いました。作品が完成する度に展示し、始めは何もなかった空間に、日々作品が増えていきました。2ヶ月間毎日、文字通り朝から晩まで手を動かし、制作された作品は計94点に上りました。

公開制作+作品展示

修復わたくし

2024年7月20日(土)ー9月23日(月・祝)

10:00~17:00

会場 | なら歴史芸術文化村 スタジオ301・302

スタジオ301・302間の可動壁を取り払い、半分を制作スペース、半分を展示スペースとして、公開制作と作品展示を並行して同一空間で行いました。作品展示は、新作が完成する度に適宜配置を変更していきました。

今回のプログラムでモチーフとなったのは、文化村の修復工房です。会場である芸術文化体験棟の隣、文化財修復・展示棟では、文化財4分野の修復工房を通年公開しています。下見の際に見学し、絵画修復への憧れが蘇ったことがきっかけとなりました。



フライヤーデザイン | 関川航平

プログラムによせて

若木くるみ

高校生の頃、奈良や京都には絵画修復の仕事があると知り、勉強は苦手だけど手先が器用だった自分の道はこれしかないと思えました。すぐに修復専門学校の資料を取り寄せたものの、学費が高くて進学を諦めたのです。

そんなことはすっかり忘れて、先日初めて、なら歴史芸術文化村を訪れ修復工房を見学しました。かつての手仕事への憧れを思い出したと同時に抱いた率直な感想は、「もし修復家になっていたらネタ出しの苦悶から解放されていたのかな…」というものでした。

大学では木版画を専攻したのですが、版画の可能性を追い求めるあまり、ここ最近は波を刷ったり道路を刷ったり、トリッキーな版表現に傾倒していました。

飽き性ゆえ、完成度は度外視で実験作ばかりを量産してきましたが、文化財修理の現場に触れてからは、じっくり腰を据えて納得のいくまでひとつの課題にかじりついてみたいと思うようになりました。

既存の作品を守り伝える修復の仕事と、まだ見ぬ表現を模索する現代美術とは、本来相容れないものなのかもしれません。それでも、修復の手つきや眼差しを持って作品と対峙することで、今までおざなりにしてきたやりきることへの真剣さを身につけられはしないでしょうか。

文化財の宝庫である奈良というこの土地で、手仕事に没頭できる幸せを噛み締めながら、自分のふざけた制作姿勢を修復したいと思っています。



文化財修復・展示棟



絵画・書跡等修復工房



歴史的建造物修復工房



考古遺物修復工房



仏像等彫刻修復工房



修復工房見学ツアー

修復くわたくし> 工房見学ツアー
 期間中の土曜・日曜・祝日(全22回開催)
 15:00 ~ 15:30
 会場 | スタジオ301・302

文化財修復・展示棟の修復工房を学芸員が解説する「修復工房見学ツアー」に倣って命名しました。前半は企画担当者による紹介、後半は若木さんによる刷り実演という構成です。本家ツアー終了後に続けて参加される方も多く、文化財修理と現代の創作現場を併せて見られる、文化村ならではの催しとなりました。





7.17~7.19 準備期間

初日から作品展示も開始するため、3日間の準備期間では材料集めやバナーづくりに加え、作品制作も行われました。

スタジオ外の壁用のバナーは、木片でスタンプをしたりステンシルをしたり、版画のバリエーションで作成しました。一文字目は版を反転させ忘れ、次は慎重になるあまり刷る際に過剰に反転させたりと想定外のこともありましたが、ただでは起きません。切込みをいれたりイラストを描き加えたり、むしろ賑やかな仕上がりに変身しました。



「おさがり版画」シリーズ

文化財修復・展示棟の修復工房において廃材を譲り受け、作品に活用したシリーズです。期間を通じて断続的に制作されました。

「おさがり版画／チューブのひらき」

「仏像等彫刻修復工房」から、使用済みの「生漆^{きうし}」のチューブをいただきました。貴重な中身を最後まで使い切るためにチューブを開くのudson。この形状から魚のひらきを連想し、はさみで切って版にしました。目にはチューブの口を使用しています。



《のどぐる》



「仏像等彫刻修復工房」と「歴史的建造物修復工房」からいただいた木片を、元の形そのままにスタンプした作品。



《工房の斧》

7.20~8.2

《天理山辺修復工房絵図／襖絵》

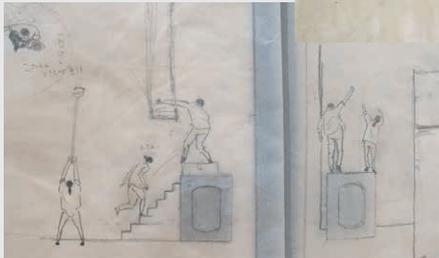
準備期間は小作品に注力し、初日から大型の作品に取り掛かりました。文化財修復・展示棟の各修復工房をモチーフに木版画を刷り、搬入時に持ち込んだ襖に張り込むプランです。

襖に仮留めたトレーシングペーパーに鉛筆で下描きしたものを、ベニヤ板へカーボン紙で写します。板のカットも、木工が得意な職員の手ほどきを受けつつ若木自ら行いました。



掛軸の修理作業の様子(絵画・書跡等修復工房)

最初に取り組んだのは、4工房のうち紙や絹を支持体とする文化財を扱う「絵画・書跡等修復工房」です。実際の工房の作業記録写真を見ながら、物の配置や修理技術者の体勢や動きを参考にしました。



ベニヤ板にたわしで水性インクをのびし、湿らせた和紙に刷ります。トレーシングペーパーの上からバレンで刷り込む際、木目を出しつつ均一に仕上げるために力を込める姿は、まるでスポーツをしているような迫力です。

1枚の版木で彫りと刷りを繰り返して多色刷りを行う、「彫り進み」という技法で制作しています。薄い色から順番に刷り、最後は輪郭線の黒である「主版^{おもはん}」で終わります。色ごとに版木を分ける「多版多色木版」と異なり、1色刷るごとに版を彫り進めるため、最後には主版しか存在せず、後から刷り増すことはできません。

上段が版木
下段が版画



紙に絵を描くように、するすると木を彫る彫刻刀さばきは鮮やかです。



上：《天理山辺修復工房絵図／多神社》
下：《天理山辺修復工房絵図／挿絵》



多坐弥志理都比古神社本殿

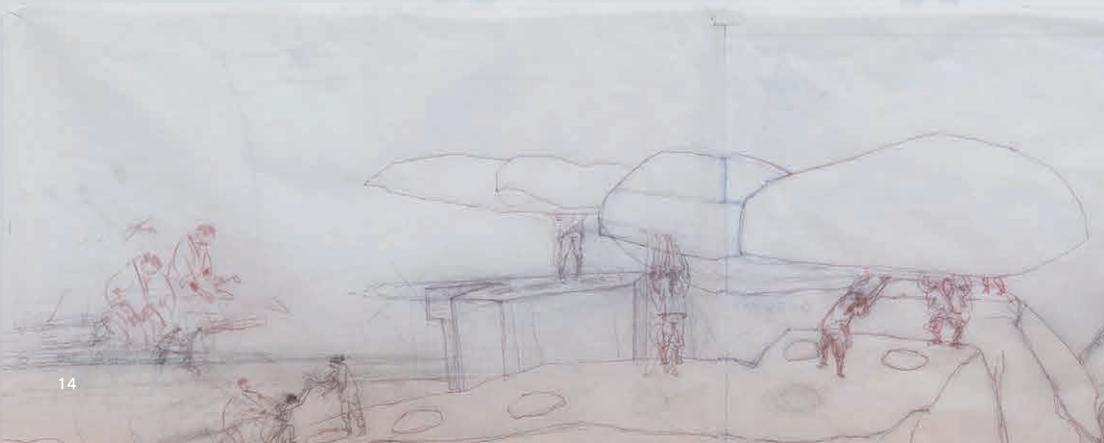
8.2～8.6

《天理山辺修復工房絵図／多神社》

「歴史的建造物修復工房」にて6カ年にわたって
おおいますみしりつひこじんじや
修理中の、多坐弥志理都比古神社（通称：多神
社）がモチーフです。文化財を継承するためには
定期的な修理が必要だと教わった影響か、作中
の人物は江戸時代風の装いになっています。



期間中は訪れた方に対し、作品について意見を
求めることが度々ありました。必ずしもそれを取り
入れるわけではありませんが、日常のさまざまなこ
とを創作の糧にするしなやかさがうかがえました。



8.7~8.12

《天理山辺修復工房絵図／阿形像》

モチーフは、當麻寺仁王像のうち口を開ける阿形像。文化村の「仏像等彫刻修復工房」にて修理を行い、ちょうど若木が下見を訪れた際には修理完成記念展示を開催していました。この像内で約20年にわたって日本ミツバチが巣を作っていたことから、作中にもミツバチが描かれています。



當麻寺仁王像のうち阿形像 修理作業の様子(仏像等彫刻修復工房)



刷り上がった作品は最後に水張りを行います。刷るために湿らせていた和紙を、テープで板に固定して乾燥させることでピンと伸ばす工程です。

水張りした木版画を襖に綺麗に張り込む方法を思案していたところ、屏風等の修復をされていたというお客さまが訪れ、アドバイスをいただきました。

8.11～8.16

《天理山辺修復工房絵図／土器パズル》

同じイメージを複数生成できる版画の特性を活かした三連作品です。刷った3枚のうち2枚を破り、そのうち1枚はさらに貼り合わせました。1枚目は土器が作られた当時、2枚目は出土した状態、3枚目は復元後を表しています。



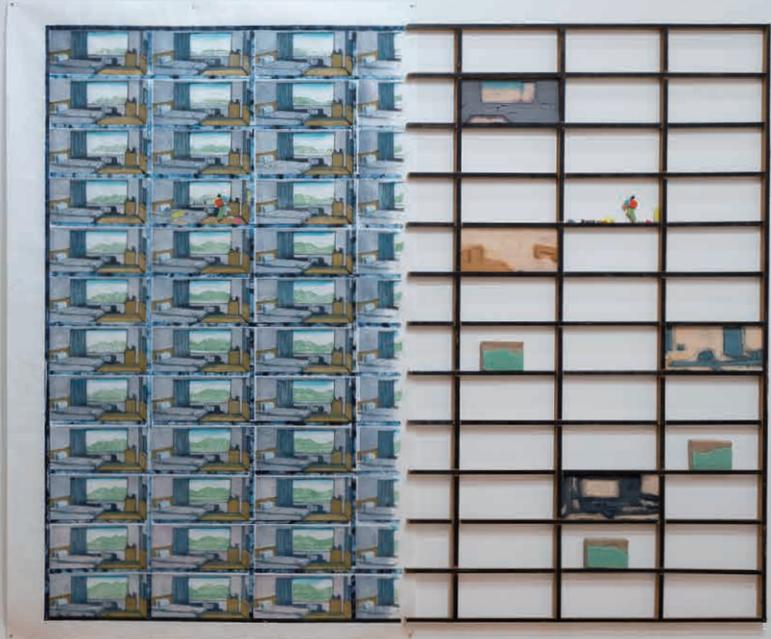
埴輪の復元の様子(考古遺物修復工房)



バラバラにする際、土器の破片らしい形にするためにはさみで切るか、支持体である和紙の性質を活かして手で破るか、迷いながら進めていました。



《天理山辺修復工房絵図／土器パズル》



《ホテルにて》



8.16～8.17 / 8.22～8.23

《ホテルにて》

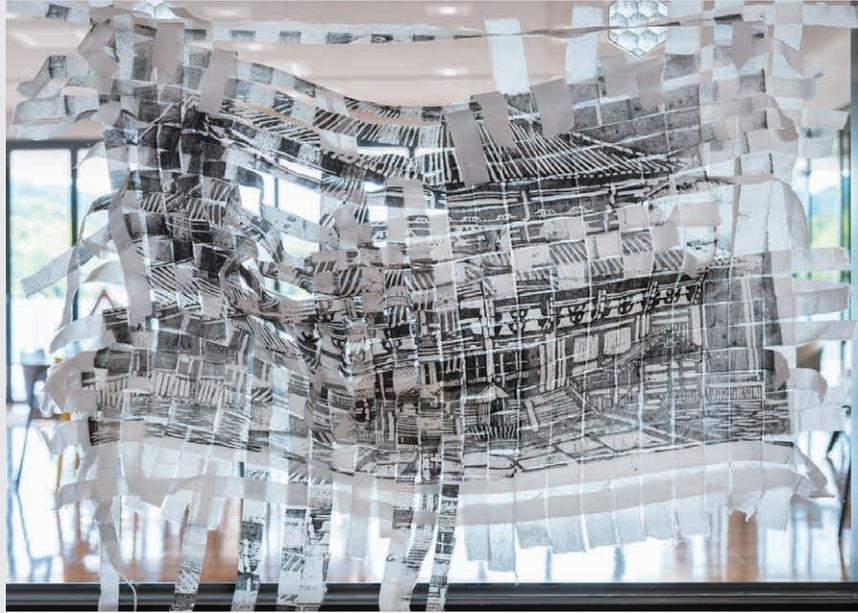
以前文化村で開催した「下張り文書解体ワークショップ」。古い衝立の下張りを剥がして残った中の木枠を、ちょうど半分に切断した状態で譲り受けました。

期間中滞在した隣のホテルをモチーフに、木枠の形状を活かして版木と版画を線対称に合わせた作品です。



大きいものをずれることなく刷るのは一苦労で、お客さまにも手伝いいただきました。

部屋の部分は、色ごとに版木を分ける「多版多色木版」です。まずは版木サイズの小さい紙で色味を調整し、本番は5版を48枠分、計240回を一気に刷りました。



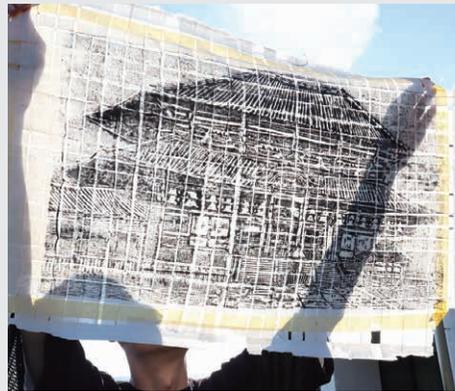
《羅生門》

8.18 ~ 8.21

「おさがり版画」シリーズ

「絵画・書跡等修復工房」からいただいた和紙の切れ端を編んで支持体になりました。

支持体の緩さに対して堅牢なモチーフとして東大寺・南大門が選ばれ、同じ版から複数作品が派生して制作されました。



《南大門》



《五重の塔》



《ヒラメ》

初期に生漆チューブで制作した「チューブのひらき」の版を再度活用。編んだ和紙をザルに見立て、《ひらきの盛り合わせ》ができました。



《ひらきの盛り合わせ》



《うな重》

《サバ》として展示していた版は、重箱を制作して《うな重》に生まれ変わりました。

さらに重箱の版を使いつつ、五重の塔から派生して制作されたのが《五重の弁塔》。お弁当の中身は、直方体の6面を刷っています。



《五重の弁塔》



《ホタルイカ》

生漆でかぶれた肌へ塗布した塗り薬のチューブは、ママアジに。しかし納得がいかなかったようで、さらに切り進めてホタルイカになりました。

版があれば時間を置いても複製できるのは版画の特徴です。しかし同じ版を別作品へと転換することや、別のものと掛け合わせて転がるように作品を展開するのは若木ならではの、こんなこともできるかも、思いついてしまったものは早くつくりたい、と版画が楽しくて仕方ないという様子でした。

8.28

「おさがり版画」シリーズ

「歴史的建造物修復工房」からいただいた^{かんなくず}鉋屑。大工さんが鉋で木材を削ると、かつお節のように透けて見えるほどの薄さになります。

試しに薄めの墨汁で刷ると、鉋屑そのものに似た透明感と木目が出ておもしろいけれど、どう活用しようかとしばらく寝かせていました。そして台風が接近する中で思いついたのが、風神雷神の^{かさね}風袋と^{てんね}天衣でした。



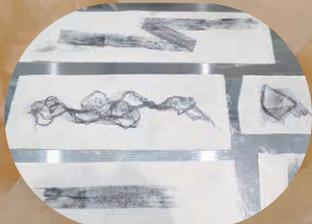
歴史的建造物修復工房



《風神雷神》

9.15 / 9.18

当初実験で刷ったものを、後から日本人形の髪やマッチの煙に見立て、追加で木版を制作して作品化しました。



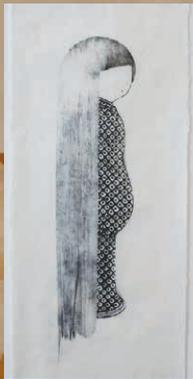
8.10頃の実験



《炎》



《煙》



《日本人形》



展示をして人に見せることで初めてわかることがある、と多くの作家が語ります。公開制作と作品展示を並行する今回の形式は、見せることとつくることを短いサイクルで繰り返すことが、どう創作に影響を与えるのかという実験の側面もありました。

若木は「展示して気づいたことをすぐ次作に反映させるので全体が底上げされた」と振り返ります。「あれとそれがあるから次はこんな作品にしようか」と展示の構成からアイデアを得ることもあり、展示全体を作品のようにつくっていくようでもありました。

また2ヶ月間毎日廊し、じっくりと自分の展示を見続けた時間も、今後の創作に影響するかもしれません。



8.29 ~ 9.6

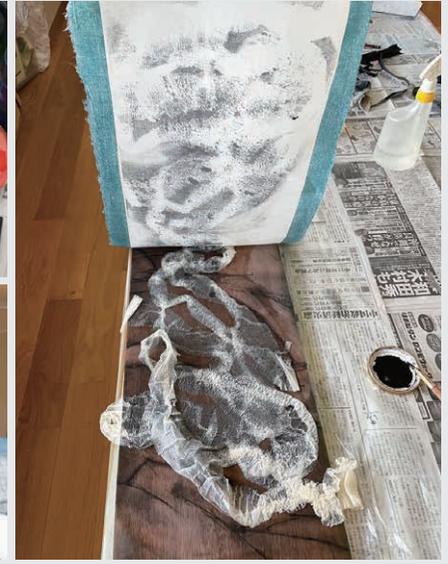
《崖軸／スポーツ》

文化財修復・展示棟見学の際、掛軸は和紙が幾重にも重なって成り立っていると知った若木。それならばこちらは1枚の和紙に版画でつくってみよう、崖をモチーフに、と始まったのが「崖軸」シリーズです。崖を舞台にしたスポーツに次いで、まがいぶつ磨崖仏のシリーズも制作されました。



表装部分は木版、絵の部分はモノタイプで板と墨を使用しました。刷り上がった様子からスポーツを連想し、風合いを活かしてさらにスタンプやフロッタージュ、マスキングなど、さまざまな「写しとる」方法を駆使しました。

水の表現には鮑屑も活用しています。





《崖軸／スポーツ》





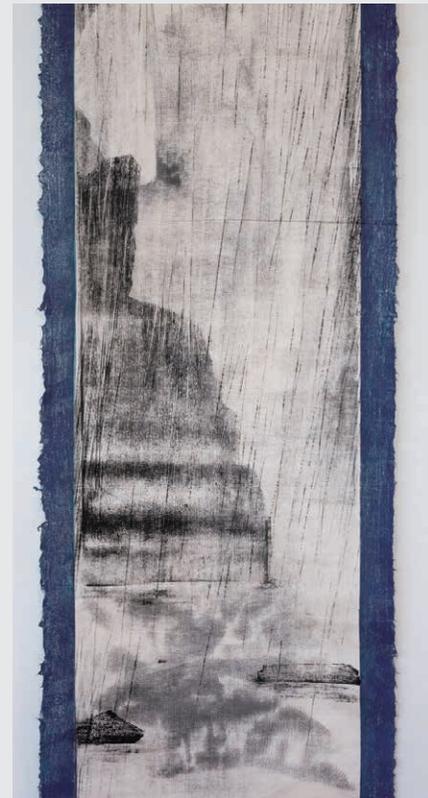
9.10 フィールドワーク

《崖軸／磨崖仏》

川のほとりの磨崖仏を見に出かけるとともに、さまざまな場所で乾拓／フロッタージュを行いました。実物に触れたことで、磨崖仏のイメージが膨らんだようです。



「崖軸」シリーズで使用している和紙の作り手である「福西和紙本舗」を訪れ、和紙漉きを体験しました。



9.16～9.21

文化村でも石や館内の床を刷りとるほか、ベニヤ板の木目を刷って雨に見立てるなど、制作のバリエーションは増えていきました。



最後にゴム印の落款を押すと、画面がぐっと締まりました。



vol.6 若木くるみ

持ち込んだ建具の形状から着想した《門ドリアン》や《位置についてよい》、ワークショップ参加がきっかけの作品など、さまざまなものを起点に制作が行われました。

8.15

障子紙を一部切り抜き、水性木版で刷った色面を裏から張りました。



《門ドリアン》



8.27

瓦の字や紋様などを記録のために転写する伝統的な技法である拓本。「歴史的建造物修復工房」が主催する体験ワークショップでとった拓本を、後日作品に活用しました。同じ版で色を変えた2作品で、真ん中を切り抜いて拓本を当てています。



《わたしのお母さん》



《法隆寺》



《位置についてよい》

9.16~21

建具の枠を活かすアイデアはいくつもありましたが、競馬のゲートに決まりました。フライングした馬が効いています。



《前方後円フン》

9.15

若木作品においては、タイトルの妙もポイントです。制作後に決まることも多いですが、本作はタイトルから始まりました。



初期に制作された《天理山辺修復工房絵図／襖絵》には画中国画として、完成した新作が描き込まれていきました。



《新芽》



《出席番号6》



《出席番号5》



《出席番号8》



《98000》



「雑み版画」シリーズ

水性木版を刷る際、湿らせた新聞紙の間に和紙を挟んで均一に湿らせます。大量に新聞が必要とすることで束を渡したところ、抜き取った折り込みチラシを活用した本シリーズが誕生しました。

チラシに切り込みを入れ、墨を塗った板に乗せ、上から和紙で刷る、という工程で、土・日・祝日に開催する「修復くわたくし>工房見学ツアー」内での制作が恒例となりました。

ウィッグチラシが西洋絵画のように変身した1作目《新芽》をはじめ、夏期講習やペットチラシなど、きらびやかでまるで陰りのない広告の世界に対して、刷り上がった作品のほの暗さが際立ちます。



9.22~23 最終日

アイデアはあるものの手を付けられていなかったものを一気に形にしました。最終日前日に版をつくって、最終日に刷り、なんと20もの作品が1日で完成しました。

「おさがり版画」シリーズ

期間中滞っていたホテルで日々提供されるアメニティも活用しました。



スリッパは裏面を刷って仏足石に。

歯磨き粉チューブは透明感から連想して海の生き物になりました。

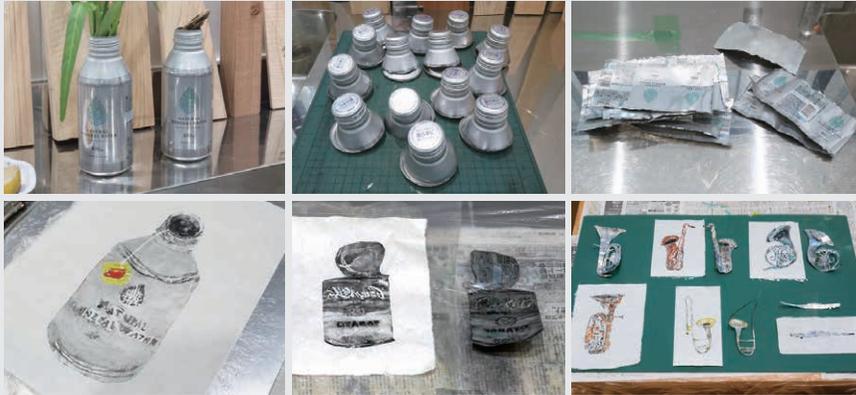


左下:《プラティ》 左上:《ヤマトヌマエビ》 右上:《ラムズホーン》

《仏足石スリッパ》

vol.6 若木くるみ

アルミのミネラルウォーター缶を開いて版にし、ミネラルウォーター缶そのものやキャンベルスープ缶、吹奏楽部出身の職員からヒントを得た金管楽器などができました。



《ティータイム》

《キャンベルスープ》

左上:《サクソ》 右上:《ホルン》
左下:《チューバ》 中央下:《トロンボーン》 右下:《フルート》

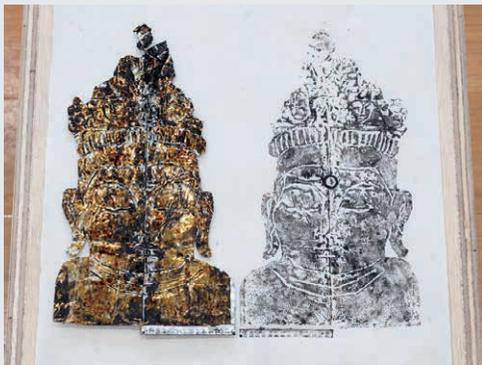


和紙の原料である楮を彫り、紙漉き体験でつくった和紙に転がして刷りました。



《つな引き》

追加でいただいた生漆チューブで「チューブのひらき」の仏像シリーズを制作。



《十一面観音》



最終日は終了時刻の17時ぴったりまで、作品制作を続けました。



アーティストトーク

2024年9月7日(土)

15:00~16:00

会場 | 交流ラウンジ

これまでの創作や今回のプログラムについて、走ることで作るということについてなど、お話を伺いました。



幼児向けアートプログラム見学

文化村で行う幼児向けアートプログラムのうち、6日間同じメンバーが集まる「てでかんがえる」。今回は「墨」をテーマとしていたので、墨で版画を刷る様子を子どもたちが見学に来ました。



ワークシート

「おして建てようスタンプの塔」

文化村の各棟に設置するワークシートの、若木特別版として考案されました。モデルである興福寺・五重塔は、2031年まで保存修理をしていて全体が覆われ見えないので、スタンプで好きに建ててみよう!というもの。イラストもスタンプも若木が制作しました。





ドキュメントに寄せて

若木くるみ

「締め切りがないとどこまでも怠け続けちゃうんですよ」という話に、遠山さんは「わたしもです」と同調してくれました。遠山さんのそれ、本当ですか。まずはこのテキストを締め切り当日である今、書き始め、そして今日中に片付けようとしていることを褒めてほしいです。わたしは大変な怠け者ではありますが、締め切りさえ与えてもらえれば重い腰を上げられる人間です。

わたしがレジデンスを好むのは終わりがあるからで、毎日なんらかの締め切りに追いまわられている感覚が結局好きなんだと思います。遠山さんが見張ってくれていると思うとサボらずに済んだし、夏のわたしは良かったなあ。おとなになって一生懸命だとか全力だとか言うのも暑苦しいけど、全力を尽くせた爽快感でいっぱい！
高校球児みたいな一礼を残して天理をあとにしたのでした。

京都に帰ってきてからは案の定元の自分に戻って、長時間睡眠を超える超時間睡眠をひたすら貪りながら「遠山さんがいないとがんばれないよー」「家が狭くてつけれないよー」「あついでよー（天理では空調完備のホテルに滞在）」としばらくグズっていましたが、そんなこともあるうかとあらかじめ展覧会の予定をバンバンねじ込んでいたため、無事締め切りに合わせてつくりまくるあの日々に戻ることができました。

『修復わたくし』は、人間そんな簡単に変わるわけなからうかと自嘲的につけた皮肉たっぷりのタイトルだったのですが、簡単に変わらないことをいやというほど知っているからこそ、締め切りを設けて強制的に自分を奮い立たせている現在です。

あと、家を買った!!!!

すごい広い!!!!

中古! そんなにきれいじゃない! 修復し放題!

『修復わたくし』に向けた大きな一歩を、わたしは踏み出しました。

自分自身も、家も、この世の中のなんでもかんでもを作品と捉えて、生涯つづく修復の旅を楽しみ尽くしてやるつもりです。

No.	完成日	シリーズ	タイトル	素材
1	7.18	おさがり版画	浮き舟	和紙、墨
2	7.18	おさがり版画	工房の斧	和紙、墨
3	7.18	雑がみ版画	新芽	和紙、墨
4	7.19	雑がみ版画	片言	和紙、墨、水性インク
5	7.19	雑がみ版画	どよめき	和紙、墨
6	7.19	おさがり版画／チューブのひらき	のどぐろ	和紙、油性インク
7	7.19	おさがり版画／チューブのひらき	アジ	和紙、油性インク
8	7.19	おさがり版画／チューブのひらき	ヒラメ	和紙、油性インク
9	7.19	おさがり版画／チューブのひらき	サバ	和紙、油性インク
10	7.20	おさがり版画	坂下る	和紙、墨
11	7.20	おさがり版画	死んだまね	和紙、墨
12	7.20	おさがり版画	困る	和紙、墨
13	7.20	おさがり版画	ゴロツキ	和紙、墨
14	7.20	おさがり版画	腰痛	和紙、墨
15	7.20	おさがり版画	ほろほろ	和紙、墨
16	7.20	おさがり版画	河童	和紙、墨
17	7.20	雑がみ版画	出席番号1	和紙、墨
18	7.21	雑がみ版画	出席番号2	和紙、墨
19	7.27	雑がみ版画	出席番号3	和紙、墨
20	7.28	雑がみ版画	出席番号4	和紙、墨
21	8.2		天理山辺修復工房絵図／襖絵	襖、和紙、水性インク
22	8.6		天理山辺修復工房絵図／多神社	襖、和紙、水性インク
23	8.10	雑がみ版画	出席番号5	和紙、墨
24	8.11	雑がみ版画	出席番号6	和紙、墨
25	8.12		天理山辺修復工房絵図／阿形像	襖、和紙、水性インク
26	8.15		門ドリアン	障子、和紙、水性インク
27	8.16		天理山辺修復工房絵図／土器バズル	襖、和紙、水性インク
28	8.18	おさがり版画	羅生門	和紙の切れ端、墨
29	8.18		南大門	和紙、墨
30	8.19		五重の塔	和紙、墨
31	8.20	おさがり版画／チューブのひらき	うな重	和紙、油性インク
32	8.21	おさがり版画／チューブのひらき	ひらきの盛り合わせ	和紙の切れ端、水性インク
33	8.22		お弁当	和紙、墨、水性インク
34	8.22		五重の弁塔	和紙、墨、水性インク
35	8.24		ホテルにて	木枠、合板、和紙、水性インク
36	8.24	おさがり版画／チューブのひらき	マメアジ	和紙、油性インク
37	8.24	おさがり版画／チューブのひらき	ホタルイカ	和紙、油性インク
38	8.25	雑がみ版画	出席番号7	和紙、墨
39	8.27		わたしのお母さん	和紙、墨、水性インク
40	8.27		法隆寺	和紙、墨、水性インク
41	8.27	雑がみ版画	チラン寿司	和紙、墨
42	8.28	おさがり版画	風神雷神	和紙、墨
43	9.1	崖軸／スポーツ		和紙、墨、水性インク
44	9.1	崖軸／スポーツ		和紙、墨、水性インク
45	9.1	崖軸／スポーツ		和紙、墨、水性インク
46	9.1	崖軸／スポーツ		和紙、墨、水性インク
47	9.1	崖軸／スポーツ		和紙、墨、水性インク

No.	完成日	シリーズ	タイトル	素材
48	9.1		崖軸／スポーツ	和紙、墨、水性インク
49	9.6		崖軸／スポーツ	和紙、墨、水性インク
50	9.6		崖軸／スポーツ	和紙、墨、水性インク
51	9.6		崖軸／スポーツ	和紙、墨、水性インク
52	9.6		崖軸／スポーツ	和紙、墨、水性インク
53	9.6		崖軸／スポーツ	和紙、墨、水性インク
54	9.6		崖軸／スポーツ	和紙、墨、水性インク
55	9.11		前方後円墳	和紙、水性インク
56	9.14		位置についてようい	建具、和紙、水性インク
57	9.14		まっかなお鼻のとなりのシカさん	和紙、水性インク
58	9.14	雑がみ版画	98000	和紙、墨
59	9.15	おさがり版画	日本人形	和紙、墨
60	9.16	雑がみ版画	出席番号8	和紙、墨
61	9.18	おさがり版画	炎	和紙、水性インク
62	9.18	おさがり版画	煙	和紙、墨、水性インク
63	9.18	おさがり版画	リボン	和紙、水性インク
64	9.21		崖軸／磨崖仏	和紙、墨、水性インク
65	9.21		崖軸／磨崖仏	和紙、墨、水性インク
66	9.21		崖軸／磨崖仏	和紙、墨、水性インク
67	9.21		崖軸／磨崖仏	和紙、墨、水性インク
68	9.21		崖軸／磨崖仏	和紙、墨、水性インク
69	9.21		崖軸／磨崖仏	和紙、墨、水性インク
70	9.21		崖軸／磨崖仏	和紙、墨、水性インク
71	9.21		崖軸／磨崖仏	和紙、墨、水性インク
72	9.21		崖軸／磨崖仏	和紙、墨、水性インク
73	9.21		崖軸／磨崖仏	和紙、墨、水性インク
74	9.22	雑がみ版画	出席番号9	和紙、墨
75	9.23		グレート版画ジャーニー	和紙、油性インク
76	9.23	おさがり版画	仏足石スリッパ	和紙、油性インク
77	9.23		つな引き	和紙、油性インク
78	9.23	おさがり版画／チューブのひらき	涅槃像	和紙、油性インク
79	9.23	おさがり版画／チューブのひらき	十一面観音	和紙、油性インク
80	9.23	おさがり版画／チューブのひらき	阿修羅像	和紙、油性インク
81	9.23	おさがり版画／チューブのひらき	与願印像	和紙、油性インク
82	9.23	おさがり版画／チューブのひらき	大日如来像	和紙、油性インク
83	9.23		缶ビール	和紙、油性インク、水性インク
84	9.23	おさがり版画	ホルン	和紙、油性インク、水性インク
85	9.23	おさがり版画	チューバ	和紙、油性インク、水性インク
86	9.23	おさがり版画	トロンボーン	和紙、油性インク、水性インク
87	9.23	おさがり版画	サクソ	和紙、油性インク、水性インク
88	9.23	おさがり版画	フルート	和紙、油性インク、水性インク
89	9.23	おさがり版画／チューブのひらき	ヤマトヌマエビ	和紙、水性インク
90	9.23	おさがり版画／チューブのひらき	ミジンコ	和紙、水性インク
91	9.23	おさがり版画／チューブのひらき	ラムズホーン	和紙、水性インク
92	9.23	おさがり版画／チューブのひらき	ブラティ	和紙、水性インク
93	9.23	おさがり版画	キャンベルスープ	和紙、油性インク
94	9.23	おさがり版画	ティータイム	和紙、油性インク、水性インク

レビュー

つねに前景化する身体

平野春菜 (アートコーディネーター)

滞在期間と場所が限定されるアーティスト・イン・レジデンスプログラム（以下、レジデンス）において、若木は滞在の日々をカウントダウンするかのように猛烈な勢いで作品を生み出している。いわゆるレジデンスは、アーティストが日常生活から離れ創作活動に集中できる場を与えるものとされる。しかし若木を見ると、レジデンスとは自分の身体を定められた場所に固定し、終わりまでの時間をどう駆け抜け、自身をどう提示するかという連のパフォーマンスのようでもある。

少し時間を遡るが、京都芸術センターで開催されたグループ展「のっぴきならない遊動：黒宮菜葉／二藤建人／若木くるみ」（2017年5月25日～7月2日、企画：黒宮菜葉）において、若木は本展開幕の前日、日本海側である福井県小浜から京都市内の出町柳までをコースとする「鯖街道ウルトラマラソン2017」（同年5月24日開催）に参加している。トレイルランを含む過酷な道のを、鯖が描かれたユニホームを身につけて見事完走。同展ではその走行を記録した映像作品《鯖街道 77km》も展示された。出展作としては、京都芸術センターの和室をフル活用し、畳をひっくり返して剥き出しになった板の間にチョークで描いたドローイングを縦横無尽に展開したインスタレーションが要ではあったものの、開幕前日に77kmの山道を打破する、という選択肢を取れること、そのメンタリティをアーティストでありランナーである若木を語る上での重要な点として言及しておきたい。

若木はその後、飛騨山脈の山荘に滞在する「雲ノ平山荘アーティスト・イン・レジデンスプログラム」（2020年）や、石巻市の複合施設「モリウミアス」（2021年）、「金沢湯涌創作の森 AIR プロジェクト」（2023年）など様々な土地での個性的なレジデンスに参加する。よじ登った針葉樹に和紙を当て、樹皮の模様をフロッタージュで写しとる「森版画」シリーズや、水に流し

たいと思う出来事を水彩色鉛筆で画用紙に描き、寄せる波にぶつけることで描画イメージの流出を試みた（しかし実際は、波の力で画用紙が砕けてしまった）「波版画」ワークショップの考案、降り積もった雪のテクスチャーを墨汁で転写する「雪版画」など、滞り場所の環境に応じた独自の表現手法を編み出してきた。いずれの手法も、もとの版が自然物や現象であるため版画と名付けながらも複製技術からは遠く距離があり、否が応でも制作プロセスを観客に想起させることで、イメージを認識するよりも先に印刷行為をする若木自身の身体を強く印象づけている。

「COUNTER POINT」（2022年）というレジデンスに参加した若木は、創作場所であるFabCafe Kyoto / MTRL KYOTOの備品であるデジタル刺繍ミシンに出会い、版画から離れた表現を試行した。下絵のドローイングをデータ化しミシンにインストールすると、若木の描きが刺繍として再現される。どんぶりに見立てたポケットから刺繍で描かれた箸が糸の麺を掴んでいる様子や、プリントされたロゴマークのワニに捕まって食べられてしまった人を刺繍で追筆するなど、支持体である既成服の構造を活かしたイメージを続々と繰り広げ、3ヶ月余の間に数十着が完成。その販売会は、ファストファッション界の最大手にかけて「唯一無二クロ」と銘打たれているものの、データ化した下絵と既成服の支持体という点で、厳密には複製が可能である。ここで若木が版画というメディアに立ち戻ろうとしているように見えることは興味深い。（プログラム終了後、若木は刺繍からあっさりとは離れ木版画に戻っている。）

なら歴史芸術文化村でのレジデンス「修復わたくし」では、若木がスタジオに滞在する約60日間はすべて一般公開とされていた。観客と和やかに言葉を交わしながらも、若木の手元は常に描画や印刷行為などで忙しく動いている。若木の版画作品には「見立て」をユーモラスに取り入れる手法が多用されるが、このレジデンスでは、制作する若木自身を修復家に見立てるという前提に依ってこそ、展示された数多の作品群が改めて活き活きと見えてくるものだった。自らの身体を手放して提示するのではなく、見立ての構造の内に置くこと。それは、観客の視線に晒され続けるなかで身体を確実にコントロールするための技術であるようにも思われる。版画家、ランナー、パフォーマンスアーティスト。これらの異なる側面を繋ぎ合う中心に若木の強靱な身体がある。



企画ノート

2ヶ月をとおして、若木の集中力とエネルギーはすごかった。週1日の休館日も返上し、公開時間の10~17時以外もスタジオで制作し、昼休憩はほぼ取らない。いつスタジオを見に行っても、手を動かしている。滞在するホテルでも制作をしていたらしい。

そこにたまたまあったものや廃材を作品に活用し、失敗や間違いも転換して表現に取り込み、若木の全てが創作へと向かっている。どうにも楽しくて仕方ないという興奮と、こうしていなければ存在できないという切迫感が、交互に若木を駆り立てている様子だった。こうして衝動を抱え続け、かたちを与えていく者を芸術家と呼ぶのだろうか。一方でさまざまな衝動やエネルギーは、誰の中でも生じているものかもしれない。なにかを守るために自分をごまかして、そうするうちに気づくことすらできなくなっているのでは、と我が身を振り返る。

若木の気迫と作品数に触れた来訪者は「こんなにやるなんてすごい」と感嘆し、制作する様子に見入っていた。その度に若木は「がんばるのは当たり前だから…」と浮かない表情だった。しかし、全身全霊をかけて創作を行う凄みはやはり特筆すべきものがあり、見る者を魅了していた。これは若木の表現の一部としても、切り離すことはできないものだ。

文化村クリエイションは「創作の過程を開く」ことをテーマとしている。なにかを見出して転換させる手つきや、切実さ、ないものが生まれることなど、創作の過程そのものに力があると信じているためだ。エネルギーをみなぎらせて数々の作品を生み出す若木の姿は、説得力を持ってそのことを示してくれた。

(遠山きなり)

文化村クリエイション vol.6 若木くるみ

企画 | 遠山きなり(なら歴史芸術文化村)

主催 | なら歴史芸術文化村

文化村クリエイション ドキュメント 2024-2025

編集 | 遠山きなり

写真撮影 |

松村康平 pp.2-6, 7(右上), 8(左下), 9(右下から2枚目), 11(右上), 12, 14-15, 16(右上2枚), 17(左下から2枚目), 19(下), 20(上), 21(上), 22(上,下中,下右), 23(左上,右上,中右), 24(下から2枚目), 25(上/映像キャプチャ,下), 26(下), 27(上), 28-29, 30(上,右), 31(左上,左下), 32-33, 34(左上,下), 35(上,下右), 37(下), 38(上から2枚目中・右, 下から2枚目右, 下左), 39(上), 40-41, 46

株式会社飛鳥園 p.13(右上)

写真提供 |

公益財団法人 美術院 p.7(左下から2枚目)

奈良県文化財保存事務所 p.13(右上)

デザイン | 関川航平

発行 |

なら歴史芸術文化村

〒632-0032 奈良県天理市柚之内町 437-3

発行日 | 2025年3月

無断転載・複製禁止

文化村
クリエイション

vol.6 若木くるみ

